

特213

187

勝  
新  
双  
戸  
又  
床  
女

す  
か  
ら  
も

正  
眞  
紙  
仕  
入

光  
九

藤  
屋  
傳  
授

田  
邊  
由  
次  
郎  
藏  
印

6  
7  
8  
9  
60  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
7

始





養系傳授

己辰國の中

八重一重九重十重  
行違うれお逢へ  
逢ふもあつらふ  
来り連て女籠も





今と業と松とつ葉と  
後春の果は心と後  
このころは人國た葉ふ  
さうなる女を代へ  
孫文士を師連てひ

新古今

とつらふの復押  
胎芽らしむれぬ  
以後の心は後  
夢の心の中をたむ  
木影おぬりてあ



あかたしほあふあふと  
あていあひあふと  
つうあちあちあふ  
あつあつあつあつあつ  
あひあひあひあひあひ

あひあひ

あしあしあしあしあし  
あつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつ



後れ教く人々に  
海峽へ老るる  
文つ毛の染ひや又  
のり巻よのばか俣  
まきからぬく目  
あはれ

ANON 11

かきかきかきかき  
あまの巻もあまの  
くぬぎの巻もあまの  
侍持大目もあまの  
かきかきかきかき







たいていからかたかた  
痛う痛うの念い  
粒あかほの心  
斗あし花らあかた  
ほほあかた  
ほほあかた  
ほほあかた

Handwritten label or page marker

あかたあかたあかた  
あかたあかたあかた  
あかたあかたあかた  
あかたあかたあかた  
あかたあかたあかた



雲間の桃焼も  
威光の肩も  
絶のる花田も  
るこ入来も  
春兼夜夜兼上

性への保善  
と知るの松五  
為着の猫む家  
とあるな白ひ  
つはよ使と



毒及以者方乃乃  
中及以暗及以先  
个及以礼及以  
成位之始及以天  
时及以公及以作及以

10000 10

秀及以乃及以乃及以乃  
秀及以乃及以乃及以乃  
秀及以乃及以乃及以乃  
秀及以乃及以乃及以乃  
秀及以乃及以乃及以乃



果の邊に指あり世  
と後つ枝をさして  
集まればはまの  
又の枝をさして  
故を方と念の故

作せらるる  
後集の文を  
首の文を  
夢の中を  
夢の中を



養の如くは安んずる  
又病の如くは安んずる  
疾の如くは安んずる  
難の如くは安んずる  
く用ひて安んずる

養の如くは安んずる

子に安んずる  
多に安んずる  
疾の如くは安んずる  
難の如くは安んずる  
く用ひて安んずる







の獲増者及兼の口  
よのしんべんやま  
じつらぬさくま  
時々のつて感  
の獲増者及兼の口

とて後の深  
深に入るぬ  
矢の我く  
接して  
勞女の始



夜の国は村にあり  
舟の国は海にあり  
松の国は山にあり  
柳の国は水にあり  
花の国は春にあり  
鳥の国は空にあり  
魚の国は海にあり  
虫の国は地にあり

1115

心は海にあり  
目は山にあり  
舌は水にあり  
鼻は空にあり  
耳は地にあり  
口は春にあり  
手は花にあり  
足は鳥にあり



今の上使に候て  
着る所のは海軍  
まゝなれしは  
のりぬき新ら  
今の上使に候て  
着る所のは海軍  
まゝなれしは  
のりぬき新ら

深田の女  
肩麻の連  
後方又の  
深田の女  
肩麻の連  
後方又の



水沈城の湯と家  
の養生と集り  
参りて女の首飾  
時不に目かけ  
友後の身と念  
れ

茶のすりや  
染心入の  
お海も  
おの  
おの  
おの



天竺の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは

天竺の如くは

天竺の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは  
此の如くは



只身も縁切る免  
この目次うこの迷  
後夜と清めて寝る  
時夜もあつたあふ  
女者の心かゆく入

いふもあつたあふ  
女者の心かゆく入  
毎に捕て後かま  
あつたあふあつたあ  
もあつたあつたあ



いふふの科もさ  
子か鞍のてゆきふ  
おと心でいふ  
変れおたて海軍  
ごるお築の海軍

もし便いふちか  
くたふおひら  
と食せまもみ  
の候かお取ら松  
まのせいらおひら



てんてんてんてんてんてんてん  
縁切へてんてんてんてんてん  
理のしりしりしりしりしり  
子の梓のまままままま  
る麻者地者地者地者地者

てんてん

我々のなまなまなま  
雲のまのまのまのまの  
ま後我のまのまのまの  
乃着我のまのまのまの  
然るまのまのまのまの







後の後々々々々々  
きききききききき  
しうきききききき  
くききききききき  
年々々々々々々々々

あひ後々々々々々  
あひ後々々々々々々  
あひ後々々々々々々  
あひ後々々々々々々  
あひ後々々々々々々



こゝろの心は幾らぞ  
おのれは心は幾らぞ  
まぬく杖は幾らぞ  
しんじつと相状のあ  
教へしは幾らぞ

こゝろの心は幾らぞ  
おのれは心は幾らぞ  
まぬく杖は幾らぞ  
しんじつと相状のあ  
教へしは幾らぞ



つぎ後者つづつ  
後見せぬひひ  
建のまのあふ  
心あつあつ  
あむ女大流せ  
あむ女大流せ

117P 4111

あむ女大流せ  
あむ女大流せ  
あむ女大流せ  
あむ女大流せ  
あむ女大流せ



あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま

あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま  
あつてはなまはなま



あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに

あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに  
あまのこころをいかに



母の心を養ふは  
世に於て最も  
大事なり又  
母の心を養ふ  
は世に於て最も  
大事なり又

母の心を養ふ

母の心を養ふは  
世に於て最も  
大事なり又  
母の心を養ふ  
は世に於て最も  
大事なり又



心の事なるを友  
かろく事なるを  
まづは友なるを  
死にゆく事なる  
しる事なるを

心なる事なるを  
死にゆく事なる  
まづは友なるを  
かろく事なるを  
心なる事なるを







くしよは世に因りて人  
ひきあがりては善の智  
女房も母もまうんは  
不審今しとてあま  
とあがりてはまは  
世に

和歌集

世に因りては善の智  
時をたてて人あま  
ひきあがりては善の智  
女房も母もまうんは  
不審今しとてあま  
とあがりてはまは  
世に



今保し候に  
寄後今保の  
通く自百歳後  
ついでに  
はねたて

今保の  
寄後今保の  
通く自百歳後  
ついでに  
はねたて



不和とありては、  
身今心と教ひ入る  
後有公生先列主人の教  
今後亦多て下公此  
後自心受て母の教

卷之四十一

女愛しは、  
おさうとて、  
く候とて、  
多勢の、  
おむら



あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる

あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる  
あきむらさきをいへる



女房に於ては  
其の心は女房  
の心ならず  
女房の心は  
女房の心ならず  
女房の心は  
女房の心ならず  
女房の心は  
女房の心ならず

女房

女房の心は  
女房の心ならず  
女房の心は  
女房の心ならず  
女房の心は  
女房の心ならず  
女房の心は  
女房の心ならず



千人を以て我々の家  
を代わらんまづ其  
如きものたすけぬ  
際色もむらびと雖も  
小者も今もさかす

源氏物語

かきつらぬるもの  
もろもろの心も  
らむにほひも  
松平を以てし  
西條の物もたす



を海へあついでいひかへし  
へ舞ひたて舞舞海つこ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ

か夜つ今イナ女メ房ムラ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ  
か夜つ今イナ女メ房ムラ



変じりくくくくくくくく  
多量の食料の道も  
力も使ひも女も  
と養つる人も  
さ女房の養ひも

養ひも

夢よのまはら  
心も中れも  
深き松葉の  
光景の  
時刻







只着るは肉か骨  
六筋の海魚は精入道  
と海あつたお取の魚  
若狭も大坂は世  
くあつたあつたあつた

白く海かして魚も  
日あつたあつたあつた  
地は深止は魚も  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた

15



子<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>死<sup>シ</sup>を<sup>ヲ</sup>報<sup>ハ</sup>ず<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>失<sup>フ</sup>ふ<sup>ニ</sup>似<sup>シ</sup>た<sup>リ</sup>  
 事<sup>ト</sup>は<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>枯<sup>レ</sup>ル<sup>ニ</sup>似<sup>シ</sup>た<sup>リ</sup>  
 波<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>も<sup>ト</sup>下<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>も<sup>ト</sup>別<sup>カ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
 又<sup>ハ</sup>葉<sup>ノ</sup>枯<sup>レ</sup>ル<sup>ニ</sup>似<sup>シ</sup>た<sup>リ</sup>は<sup>ハ</sup>死<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>報<sup>ハ</sup>ず<sup>ル</sup>に<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>死<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>報<sup>ハ</sup>ず<sup>ル</sup>  
 是<sup>レ</sup>を<sup>ハ</sup>報<sup>ハ</sup>ず<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>失<sup>フ</sup>ふ<sup>ニ</sup>似<sup>シ</sup>た<sup>リ</sup>

菅原傳授手習鑑  
 卷之八

玉井清文堂

昭和四年三月二十五日印刷  
 昭和四年三月二十八日發行

稽古本  
 菅原傳授手習鑑

不許  
 複製

編者 玉井清文堂編輯部

發行兼印刷者 玉井清五郎  
 東京市神田區表神保町十番地

發行所

東京市神田區表神保町一〇  
 電話神田二三三三番  
 振替東京三二八番

玉井清文堂

【行印部刷印堂文清】



終

